

# 「ODA見返り論」からの脱却を

東京外国語大学大学院准教授  
**松田クラーセン** さやか  
ふなだ くらーせん さやか

経済成長の一方で、格差の拡大、権力の腐敗と濫用に苦しむアフリカ。

「ODA見返り論」から脱却し、グローバル世界での共存のための

新たな協力のかたちを指すときがきた。

二〇〇六年津田塾大学国際関係学研究所博士課程修了。博士（国際関係学）。国連モザンビーク活動選挙部門職員などを経て、二〇〇九年より現職。著書に「モザンビーク解放闘争史」、編著に「アフリカ学入門」など。

いま、この原稿をアフリカのモザンビークで書いている。同国で最も僻地とされる北部四州二七〇〇キロを駆け抜けたが、道中目にした光景にいまでも驚いている。道路は依然大部分が舗装されていないもの、どんな僻地にも携帯電話のアンテナが建ち並び、真新しいガソリンスタンドが完成し、農作物や商品をつっぱいに積んだ自転車をこぐ男たちが道路に溢れる。

一方筆者がゼミ合宿で毎年通う日本の中山間部。訪れるたびに、路線バスが廃止され、小学校が廃校になり、畑は放棄され、中心街の商店のシャッターは下りたまま。道行く人は、腰の曲がったおばあさんの姿ばかり。まさに対照的といつていい光景である。しかし、モザンビークがいつもこんなふうには活気溢れる国だったわけではない。

筆者がこの国を初めて訪れたのは一九九四年。一六年にわたった世界でも類を見ないほどの醜い戦争直後のこ

とであった。二〇〇万人が死に、実に人口の三分の一が難民・避難民となり、大量の武器と子ども兵を残した戦争の爪痕は深刻で、地雷によって道路網は寸断、学校や病院の大半が破壊され、商店は空っぽ、人びとは瘦せこけ、その表情には不安がありありと浮かんでいた。

あれから一八年。あの時筆者が出会ったモザンビークは、もはやここにはない。この国は見違えるほどに復興を果たし、世界に模範として称賛されるまでに変貌を遂げた。特にここ数年、国内各地でボーキサイト、天然ガス、石炭などが確認され、これらの天然資源や広大な農地を狙った外国企業の進出ラッシュが相次いでいる。

## 経済成長の裏で広がる格差

ただし早合点してもいけない。モザンビークは依然世界

最貧国の一つであり、GDP比で二八二カ国中二二三位、貧困者（一日一ドル以下で生活する人）は国民の六割を占める。二〇二五年までの達成が国際公約となつている国連ミレニアム開発目標（MDGs）については、幼児や妊産婦の死亡率も依然高く、HIV／エイズの感染率は判明しているだけで二五〜四九歳人口の一割を超え、最大二〇万人近くがエイズで死亡している。人口が二〇〇〇万人ほどのこの国にとって、そのインパクトは非常に大きいものがある。

安全な飲料水へのアクセスがある人口割合も農村部では二九％に留まつており、経済成長の恩恵が人びとの生活向上に還元されていないことがわかる。人口の大多数を占める農村住民の暮らしは依然厳しく、天候や親の健康状態次第で、子どもたちは飢え、女の子たちが身売りをしなければならぬ現実に変わりはない。表面上の経済成長の一方で、社会課題の解消にはほど遠い状態にあることがわかる。

経済成長に伴つて生じつつある問題も深刻である。海外からの投資ブームの影で、利権を有するごく一部の「持てる者」と大多数の「持たざる者」の格差は急速に拡大している。さらに、投資に絡む腐敗や権力の濫用、選

挙不正の結果、社会全体の不満は高まり、独立以来同一政権下で安定を保ってきたこの国でも、二〇一〇年には失業中の若者による大規模暴動が首都で発生し、都市機能が麻痺したほか、死傷者が多数出ている。

広がる格差はこれに留まらない。世界的な一次産品価格の高騰もあり、農村部への民間企業の流入が加速化しており、各地でタバコや綿花などの換金作物の契約栽培が活発化している。しかし、伝統的に換金作物栽培は男性、食料生産は女性の仕事となつており、儲けられるのは身体の丈夫な男性に限られる。さらに最近ブームの大豆については、企業が広大な農地を撰取しトラクターで耕すというプランテーション方式を導入しているため、地元住民の雇用も限定的で、最低賃金程度しか支給されない。せめてこれらの現金収入が貧困と栄養不足にあえぐ農村家庭の生活向上につながればよいが、いきなり降つて湧いた現金は「あぶく銭」。その大半が私たちの酒代に消えている。このような短期間の急激な変化は、家庭や村落内に格差と不和を生み出し、男性の女性に対する暴力やお年寄りの世話の放棄が観察され、コミュニティの崩壊も進みつつある。

経済成長の裏での社会問題の継続あるいは拡大とい

う「光と影」。これはモザンビークだけの傾向ではなく、サハラ以南アフリカ（以下アフリカ）の多くの国の現実でもある。IMFによると、ここ一、二年アフリカでマイナス成長を記録した国は三カ国にすぎず、金融危機にあえぐ欧米各国とは顕著な差を示している。しかし、貧困者の割合は一九九〇年比で数%しか減っておらず、人口増加の結果貧困者総数は増えており、アフリカでのMDGs達成は絶望視されている。モザンビークと同様、アフリカの過半数を超す貧困者の生活の厳しさは、貨幣経済の浸透のためすべてにお金がかかるようになり、実感として増しており、格差の広がりが社会不安を生み出している。

日本ではあまり知られていないが、北アフリカ・中東地域で起こった「アラブの春」の前後にアフリカ各地で暴動が発生しており、なかにはモザンビークのように死傷者が出る事態に陥ったケースも少なくはなかった。つまり、現在のアフリカにみられる急激な経済成長は、社会不安や政治的暴力に直結しやすい状況を招いているのである。

## 新たな段階に入った中国との関係

アフリカの光と影。そのいずれもが、今世界で注目を集めているのは間違いない。そんなアフリカで日本のプレゼン

スを感じることはきわめて稀な出来事となっている。むしろ、我々を見て「チャイナ！」との声が上がらないことのほうがめずらしい。中国からのヒト・モノ・カネは、貧しい人々の市場でも、道路建設や開発の現場でも、街中でも顕著。これに対し、日本は中国のように労働者を送っていないわけではない。中国人は現地の人びとに歓迎されていないとの反論も可能だが、日本の存在感がないことには変わりはない。

最近、アフリカと中国の関係は別の段階に入りつつあるように感じる。去年からの顕著な傾向として、「この前中国に行ったよ」と話しかけてくるアフリカ人が非常に増えている。しかも、政府やビジネス、大学関係者に留まらない。どう見てもごくフツーのおばちゃんまでが中国に仕入れに行っているほどなのである。好きか嫌いかは別として、アフリカと中国の関係は我々が思っている以上に、双方向の太いものとなりつつある。

このように日本はアフリカでは「中国の二番煎じ」的な存在になりつつあるというのに、日本国内での議論を聞いていると、いまだに「G8唯一のアジア国」のポジションに固執したメンタリテイが抜け切れていないように思える。

もちろん、外務省を初めとして日本政府もアフリカの

取り込みにも本腰を入れつつあり、政府開発援助（ODA）もその文脈で使われることも多い。そもそも日本政府は、長年にわたりODAを「外交のツール」として位置づけてきた。その前提には「あげたら感謝され、外交上で協力が得られる」という「ODA見返り論」とでも称すべき認識がある。しかし、「援助をあげているから大丈夫」という外務省の予想に反して、日本が主導した国連改革提案にアフリカ諸国が賛同しなかったことは記憶に新しい。今回の東日本大震災についても、「これまでの援助が感謝されて（アフリカを含む）各国が協力した」という認識を耳にすることも多い。しかし本当だろうか。むしろ、このような理解こそ、アフリカ側の本音を知ろうとせず、建て前でしかアフリカと付き合えない旧来型の日本の援助や外交の限界を象徴しているのではないか。

日本には「贈り物」文化があるが、贈答品は礼儀にすぎず、それをもたらったからといって我々は考えや行動を変えらるだろうか。今回の大震災で、東北以外の人びとは、東北の人たちに何かしてもらったことがあるから被災地に向かったのだろうか。「見返り論」の限界は明らかであろう。

そもそも、日本国憲法は「（国際社会で）名誉ある地位を占めたい」と宣言し、「全世界の国民が等しく恐怖と欠乏

から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認」し、「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成すること」を誓っている。つまり、「我がこと」として国際協力を国家ビジョンに掲げているのである。しかし実際は、先述のとおり、ODAは「ツール（餌）」で、アフリカとの関係も「あげる側」・「もらう側」の垂直関係に始終してきた。たとえ「受益国の要請主義」を主張しようとも、実際に「要請」を仕込むのは日本サイドである。関係者の自覚のあるなしはさておき、「援助をしてあげる」との態度はアフリカ側には明白で、ときに不快感を与えてきた。

奴隷貿易から植民地支配まで長年にわたって尊厳を奪われてきたアフリカの人びとは、他者の態度に非常に敏感である。残念ながら、その点について日本の関係者に十分な理解があるようには思えない。ただし、日本人と同様、建て前と本音の使い分けが得意なアフリカ高官たちは、そのことを口にしたりはしない。建て前には建て前を使い、「もらえるもの」をもらうことに専念してきた。しかし、最近、このような建て前上の関係すら成立しなくなりつつある。アフリカ各国の関係者はこっそり打ち明ける。「日本はあまりにもスロー」「日本は本音ではやる気がないんだ。だから付き合っていられない。」

## 誰と何を支え合うのか

では、日本は中国型のなり振り構わぬ経済進出や大規模なインフラ援助をすればそれでよいのだろうか。現在の経済成長が社会課題の解決につながらず、社会を不安定化させていることを先に示した。その原因の多くがアフリカ各国政府の腐敗や不透明性に起因し、中国はこれに深く関与している。しかし、「アラブの春」が示したように、どんな長期独裁政権も倒れる時代が到来している。そのことを政権側も民衆側も熟知しているがゆえに、民衆暴動や抑圧、政治の不安定化は今後ますます避けがたくなっていくだろう。したがって、利益だけ求め、政権の腐敗に加担する援助や投資は、社会の亀裂を深刻化させ、せつかくの事業を頓挫させるだけでなく、投資を回収できなくするであろう。最近、アフリカ各地で起きている中国人を対象とする誘拐や襲撃事件が示唆するところも大きい。

東日本大震災から一年、そしてTICAD・Vまであと二年の今こそ、我々は「建て前外交」や「援助による垂直関係」、あるいは「賄賂外交／投資」でない、もっと新しいアフリカ・日本関係の構築に本気で取り組みなくてはならない。そのヒントは東京ではなく、東北と四国にある。

大震災直後、アフリカ大使たちが、欧州各国大使館が閉鎖し避難する中で東北に向かったのは、欧州への対抗心や放射能汚染への感覚の違いもあったろうが、「自分たちにできることをしたい」と切実に願ったからであった。それは、被災地の人びとの苦悩を分かち合い、連帯の意志を表明することだったという。

支え合う関係。これこそ、あの大災害に際し世界の国々と人びとが示してくれたものであった。経済大国になり世界の頂点にいと浮かれ、勘違いしていた日本。世界の上部に陣取り、各国と関係を結ぶのではなく、一つの地球を分かち合う者同士として支え合っていけばいいのだということを、今回の大災害は我々に教えてくれた。ビジョンを共有し、それぞれの得意分野で助け合い、ないものを補い合う。いい加減、「感謝され、外交得点にするためにあげる」という前提から卒業しようではないか。

## 同志としてのアフリカ

依然多くの課題を抱えるアフリカは日本を必要としているが、日本もまたアフリカを必要としている。毎年、筆者のゼミ生の多くが留学やインターンのためにアフリカに向かう。「アフリカ留学？」と驚くなかれ。西欧諸国に留学

する学生と比べて、忍耐や機転、柔軟性や創造力、交渉力などの点で目を見張る成長ぶりである。現在二〇〇〇人の青年海外協力隊がアフリカに派遣されているが、帰国後日本の過疎地で活躍する元隊員に出会うことも多い。少子高齢化と過疎化、「引きこもり」にあえぐ日本の停滞を、アフリカの活気が救う可能性だって少なくはない。協力隊の派遣をODAに含めるどころか、こちらから授業料を払うべきというほど日本が得るものは大きい。我々はアフリカを助けているつもりが、実は助けられてもきたのである。

いま求められているのは、このような点レベルの人的交流をもう一段階上のレベルに持つていくことである。つまり、最も貧困にあえぐ人びとの生活上のため、これらの若者がアフリカの人びとと共に、地に足のついた事業を立ち上げ、育て、「食べる種」にしていくのを応援すべきと考える。実際、アフリカ帰りのゼミ生たちは、いずれアフリカの仲間たちと起業しようとして夢に向かって歩んでいる。彼らにとって、アフリカの友は「何かをしてあげる相手」ではなく「同志」。就職氷河期を、単に自分が就職できればいいという狭い考えではなく、世界の課題解決に同志と共に取り組みながら自らも食べていくという夢をもって乗り越えていこうとしている。

結局のところ、国と国の関係も人間同士の結びつきの積み重ねにすぎない。二〜三年ごとに担当者が変わる人事、建て前でしか交われない関係、「見返り」を前提とした援助ではやる意味がない。アフリカの人びとは、これまで以上に日本の本音とやる気をシビアに探り、それにあわせて行動を選択し始めている。懐に飛び込み、腹を割って語り合い、共に未来を描き、一緒に汗をかけるかどうかが問われているのである。モノやカネを右から左に移動させ、それで関係が構築できたなどと考えるのは甘い。かといって、自衛隊に汗をかいてもらおうなどと考えるのも安易。一過性のアクションではなく、双方の関係性を深められる人材にこそ投資し、彼らが地元の人びとと行う試みを徹底して応援すればいいのである。

先日来日し多忙を極めたモザンビークの首相が、わざわざ四国の松山市に飛んだ理由は何だったのだろうか。それは、松山市民が同国市民としっかり築いてきた関係を、首相としても発展させたいと望んでいたからである。「見返り論」がいかに時代遅れかがわかるだろう。世界はグローバル化し、日本の地位も落ちる一方である。その世界でどう生きていくべきかについて、アフリカが示唆してくれるものは限りなく多い。■